

No. 1098

瀬戸内海汚染

青い海、美しい風景、日本で屈指の景観を誇り魚の宝庫として知られる瀬戸内海。その瀬戸内海は今確実に変わりつつある瀬戸内海沿岸に林立するコンビナート。49年12月18日、三菱石油、水島製油所720号タンクの不等沈下で突然大量の重油が流出。流れ出た重油はたちまち瀬戸内海一面へと広がっていった。以来一ヶ月たった今も海岸線にべっとりとしみ込んだ油はいつになったらきれいになるのか見通しさえたえない。漁民はヒシヤクを手に油との闘いを続けている。心身ともに疲れたというある漁師は『水島は遠いのでここは大丈夫だと思っていたのだが……。最初のうちは油をすくう元気もあったが、今はもう何もする気力も失せてしまった』と力なく語る。徳島地方裁判所。47年の赤潮被害、48年のP・C・B汚染、そして今回の重油流出。漁民たちは自分たちの職場を奪う汚染はもう我慢ができないと、国・自治体・沿岸企業の訴訟にふみきった。彼らは安心して働ける海を返せと叫ぶ。重油流出は漁民たちに壊滅的な打撃を与えた。ノリ、ハマチ等の被害額は160億を越えるといわれている。

事故の大きさに自衛隊も出動した。連日の重油清掃作業は漁民たちの肉体をもむしばんだ。目やノドの痛みを訴える人が続出した。過労で倒れた石川寿男(63)はそのまま急死した。

1月26日、40日ぶりに試験操業に出た。海へ帰った漁師たちの顔に笑いがよみがえった。しかし、それもつかの間だった。海底は油で汚れ、網にかかる魚の大半は死んでいた。イイダコが悪臭を発していた。『いつもの3~4割しか取れん。これじゃまだまだ先の見通しは暗かな——』漁民たちはまた暗い表情に変わった。

一見美しく輝やく瀬戸内海、しかしそれは油の浮いた水面がキラキラと反射しているにすぎない。砂浜を少し掘り起こすと重油の層がある。瀬戸内海の汚染と闘う漁民たちの悲しい日課、安心して漁に出られるのはいつの日か。

企画演出者 林 斌
撮影 三橋好博
宮田禎博
木下史朗